

日本の米づくりを応援！

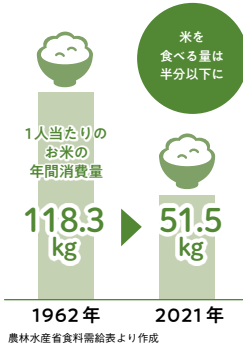
食べて 未来へつながろう

日本ではるか昔から営まれてきた米づくり。田んぼは米を育てるだけでなく、ダムのように雨水を貯める働きもあり、カエルやトンボなどたくさんの生きもののすみかでもあります。しかしいま、日本の米づくりは危機的な状況に。コープデリは、食べることで「未来につなげる」取り組みを進めています。

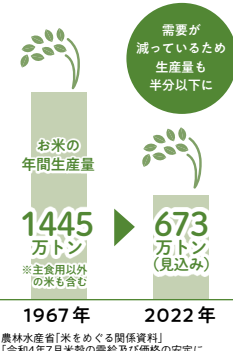
日本の米づくりがピンチ!?

日本人の「主食」である米。でもこの50年あまりで、米の消費量は半分以下になってしまいました。私たちの食卓には、パンや麺類を含めさまざまなメニューが並ぶようになり、加えてコロナ禍により外食で米を食べる量が減っているからです。

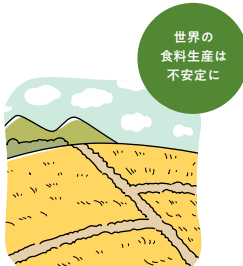
米が売れないため、生産を担う人が減り高齢化が進み、米づくりをあきらめる生産者も増えています。このままでは、おいしいご飯を食べられなくなる日が来るかもしれません。



農林水産省食料調給表より作成



農林水産省「米をめぐる関係資料」令和4年7月米穀の需給及価格の安定に関する基本指針(案)より作成



多くの食料を輸入に頼る日本。天候不順やコロナ禍、ウクライナ情勢の悪化などで、食料調達に赤信号がともっています。国内で食料を生産することはとても大切です。

コープデリは日本の米づくりを応援します

そこでコープデリは、生産者を応援するため「食べて 未来へつながろう 日本のお米づくり」応援キャンペーンを進めています。米やその加工品、ご飯に合うおかず、飼料用米を使った畜産物などの利用を呼びかけ、多くの組合員の皆さんに消費していただく取り組みです。組合員1人ひとりがおいしく食べることで、生産者の応援につながります。

新米の季節到来！  
おいしいご飯を食べよう

宅配やお店では、コープの産直米を「ご案内中！」コープの産直米は、毎年「栽培計画書」を産地と一緒に確認し、生産段階で栽培記録簿などを点検。収穫後は残留農薬・品種判別などの検査を実施しています。

宅配では、「ご飯のおとも」や「ご飯に合うおかず」などを「ご案内中！」。また9月3日～11月3日にお米を注文すると、抽選で七千人に「うれし小箱」が当たるキャンペーンを実施。また同期中に米をご利用いただいた方全員に、ご飯に合うおかずが最大10%オフの特別チラシをお届けします！

※チラシは来年1月3日のお届けです



宅配では米の利用を呼びかけるチラシを配付しました

食べて 未来へつながろう



米を食べると 佐渡のトキ保護につながる！



CO-OP産直新潟佐渡コシヒカリやその加工品の売り上げの一部を、新潟県佐渡島のトキを応援する取り組みとして、環境にやさしい米づくりに役立てている「佐渡トキ応援お米プロジェクト」。おいしく佐渡米を食べることが、トキが舞う自然環境を守ることに繋がります。



豚肉を食べると 米づくりにつながる!?

コープデリでは、2008年から「飼料用米」を使ったエサで豚を育てる「お米育ち豚プロジェクト」に取り組んでいます。休耕田などで豚のエサ用の米をつくることで田んぼを維持でき、その飼料用米を豚に与えることで、輸入に頼る家畜の飼料の一部を国産に置き換えることができます。おいしく豚肉を食べることで、日本の米づくりを支え、畜産業を元気にする取り組みです。



米をおいしく食べるレシピなど紹介中



ご飯を食べると何がいい？  
専門家に聞きました



米を中心すると、バランスのよい食事を整えやすくなります

福山 貴代さん  
長野県立大学健康発達学部教授、同大学院健康栄養科学研究科長、コープデリ連合会理事。

米(ご飯)のメリットとして、2つのことをお伝えしたいと思います。

1つ目は、ご飯そのものの味が淡泊なため、パンや麺類と比べていろいろな調理法のおかずと相性がよいこと。例えば魚を使ったおかずであれば、煮魚・焼き魚・フライ・炒めもの・蒸しもの・鍋もの・あえもの、さらには生もの(刺身)など。米が主食なら、どの調理法でもおいしくいただけます。同じ食材をいろいろな調理法で楽しむことができるということは、おかずの選択幅をひろげることにつながります。その結果、主食(米・パン・麺類など)・主菜(魚・肉・卵・大豆製品など)・副菜(野菜など)のそろったバランスのよい食事を整えやすくなります。

2つ目のメリットは、日本の食文化を伝えられること。だし・みそ・こうじや、各地域の産物、風土に合った郷土料理など、日本の食文化は米を中心とした食生活から育まれてきました。私たちの食文化を語り継いでいく上で、米(ご飯)は欠かせません。

主食としてパンや麺類を楽しむのもよし。でも1日3食のうち2食は、ご飯を選んでみるのはいかがですか。

コープデリグループは、事業と活動を通して「SDGs(持続可能な開発目標)」の達成を目指しています。



今回の取り組みは、目標12:

つくる責任 つかう責任

につながっています。

12 つくる責任 つかう責任

